

テトラクリスタルアイランド周辺 ミドルガーデン

マスターと別れ、テトラクリスタルアイランドに導かれたストレンジャー達。
ブラベリーは一人島を離れ、近くにある島、ミドルガーデンに一人立っていた。

「涼しい風・・・」

ブラベリーは島に吹いている風を感じつつ、風に靡かれていた。
だが、自分にはこの後する行動も見つからず、悩んでいた。

『新たなるマスターから授かったこの体、何に使えば・・・』

ブラベリーは自分の体を見つつ、呟いた。

マスターの祈りの結晶である鎖が、体に巻きついており、自分の体内に流れる赤い血の色をしていた。

丁度自分の心臓がある左胸に鎖が集まっており、五角形のケースに鎖は入っていた。
ケースに手を当てると、自分が生きている証拠なのか、自分の中で動く心臓の鼓動が手のひらに伝わってきた。

『自分はこれから、何をしたら・・・』

ブラベリーは鼓動を聞きつつ、空を見て考えていた。

「どうかしましたか？」

ブラベリーが一人海を見ていると、後方から声がした。
振り返ると、そこにはマスターの偽りの姿だった、ラブソディが立っていた。

「いや、ちょっとした悩み事を。」

「自分が何をすればいいのか。　ですか？」

「え？」

ブラベリーはふと、ラブソディの言った言葉に一瞬、耳を疑った。

「何故それを？」

「自分の記憶は、マスターの記憶とほぼ同じです。　貴方が出来た時の事は知っていますから、貴方が何を考えているのかは、大体察しが付きます。」

ラブソディはブラベリーに近づきつつ、そう言った。

「自分は新しく生まれ変わりましたが、でもまだ何をしたらいいのかわからない。　他の存在達にはする行動が決まっているようだが、自分はまだ、何をしたらいいのか・・・」

「では、1つ策を出しましょうか。」

「策？」

ブラベリーはラブソディを見つつ、問いかけた。

「自分がする行動が見つからないのであれば、皆さんの行動を見て回るのもいいんじゃないんでしょうか。　自然と、自分がすべき行動が見つかるかもしれませんよ。」

「悩む前にまず行動？」

「その通りです。　頭の回転はいいようですね。」

ラブソディはブラベリーに拍手をしつつ、言った。

「ありがとうラブソディ。　おかげで行動に出られる。」

「頑張ってくださいね。」

ブラベリーは翼を広げ、空へ飛び出して行った。

ラブソディはそんなブラベリーの姿を見つつ、見送っていた。

ブラベリーは目的地は無いものの、辺りを見て回るべく、島へ向けて飛んで行った。

テトラクリスタルアイランド 草原エリア

ブラベリーはしばらく海を飛び、再びテトラクリスタルアイランドへ戻ってきた。飛ぶ時に使用していた翼を羽ばたかせつつ、島へと足を付けた。

「よし、早速見てまわるか。」

ブラベリーはラプソディから頂いた知恵を心に秘め、島を散策し始めた。島にはまだ小さな鳥達や、大人の鳥達が飛んだり歩いていたり、皆がそれぞれ行動していた。ブラベリーはそんな鳥達の行動を見つつ、島を歩いていた。

「あら、ブラベリーさんじゃないですか。」

ふと、前方から自分の名前を言う声がし、ブラベリーは前を見た。そこにはアルドールが立っていた。

「どうしたんですか？」

「いや、特に用は無い。ただ、島を見て回っているだけ。」

「そうですか。」

アルドールはブラベリーを見つつ、そう言った。

「他の方々は？」

「ストレンジャー達でしたらこの島にいますが、チェリーさん達は今は何処かへ出かけているようですよ。新しい土地を見つけるんですって。」

「新しい、土地？」

「ええ。前までは立派なお城に住んでいたそうですが、今ではその城の場所もわからない上に崩壊もしてしまったそうで。それで、新しい城を作るために、土地を探しているそうですよ。」

「そうなのか。ありがとう、アルドール。」

ブラベリーはアルドールから情報を聞き、お辞儀をした。

「お役に立てたかはわかりませんが、頑張ってくださいね。」

「はい。」

ブラベリーはアルドールと別れ、再び島を散策し始めた。
アルドールはブラベリーが見えなくなると、家へ入って行った。

テトラクリスタルアイランド 岩山エリア

その後しばらく歩き、島の土地は草原から荒れた土地に変化した。
段々と生えていた森は無くなり、岩山が広がってきた。
ブラベリーは南エリアと西エリアを区切る森を抜けると、白虎達の住む岩山エリアに出て来た。
そこには白虎の子供達が元気に走り回っており、楽しそうに一日を過ごしていた。
青年の白虎達は、ロッククライミングや水泳など、スポーツを楽しんでいた。

「ブラベリー そんな所で何してるんだ？」

ブラベリーが島を見ていると、岩山の崖にいたピスフリーがブラベリーを見つつ声をかけてきた。
。

「ちょっと島を散策している。 用は特に無い。」

「そうなのか？ よっと。」

ピスフリーはそう言うのと崖から飛び降り、ブラベリーのいる場所の近くに降り立った。

「随分と高い位置だったのに大丈夫か？」

「ああ、これくらいなら平気さ。 いつもトレーニングしてるからな。」

ピスフリーは腕を上げ、筋肉を見せるようにポーズをとりつつ、ブラベリーに言った。

「トレーニング・・・」

「俺には族長の仕事以外は、特にする事が無いからな。 毎日トレーニングしてるんだ。 トレーニングしてると楽しいぜ？」

「確かに、行動するだけ体に変化が出てくる。」

「ま、そんなところだな。」

ピスフリーは笑顔でブラベリーに言った。

「じゃあ、俺は行く。」

「ああ。 じゃあな。」

ブラベリーはそう言うと、ピスフリーに見送られ、森の中へ入って行った。

テトラクリスタルアイランド 泉の庭園

ブラベリーは一人、森を歩いていると、樹が切り取られたかの様な空間が広がっていた。地面は芝生に覆われ、中心には泉が湧き出ており、噴水のように水を出していた。

「泉・・・」

ブラベリーは泉のそばへ行き、水を覗き込んだ。
水面に自分の顔が映り、自分の顔が確認できた。
頭の方には角が生えており、背中には翼が生えていた。

「何してるんだ？」

ブラベリーがのんびり水面を見ていると、後方から声がした。
振り向くと、そこにはコレージが立っていた。

「いや、特に用は無い。」

「その割には、随分と珍しい考え事をしているみたいだな。」

コレージはブラベリーを見つつそう言った。

「なぜそれを？」

「読心術さ。 お前の心を読み、行動を推測しただけさ。」

コレージはブラベリーの近くへ行き、ブラベリーの左胸のケースを指差した。

「お前の心はその中にある。 その心を読む事が、読心術だ。」

「心。」

ブラベリーはその言葉を知らないことを読み、コレージはそう言った。

ブラベリーは自分の左胸のケースに手を当てた。

「貴方は、今はどのような行動を？」

ブラベリーはコレージからの話しが終わると同時に、問いかけた。

「俺には決まった行動は今は存在しない。　しいて言うなら、大切な人を見守ることぐらいだな。」

「大切な人を、守る？」

「そうさ。　誰にでも、自然と大切な存在が出来る。　その人を守ろうとする気持ちが、俺に出来たんだ。　だからその行動をするのさ。」

「守る。　行動。」

ブラベリーはコレージからの答えを聞き、そう呟いた。

「お前も何かすることが欲しいなら、大切な存在を探すのも悪くないんじゃないか？　まあ、もうすでに出来ていたら、そんなことをしなくてもいいんだろけどな。」

コレージはそう言うと、ブラベリーを庭園に置き、森へと入り姿を消した。

『存在を、守る行動・・・』

ブラベリーは新たに入手した情報を確認し、再び島を歩き始めた。

質問

テトラクリスタルアイランド 砂浜エリア

ブラベリーは、泉でコレッジからの新たな助言を聞き入れ、再び島の散策を開始した。泉の庭園を抜け、森を抜けると、砂浜の広がるエリアへ到着した。

「砂浜・・・」

ブラベリーは目の前に広がる風景を見つつ、そう呟いた。辺りには龍族達が楽しそうに行動しており、平和な一日を送っていた。

ブラベリーが一人のんびりしていると、近くの家のドアが開いた。出てきたのはビリーブだった。

「あ、ブラベリーさん。」

コレッジはブラベリーの姿を見つけると、ブラベリーに手を振っていた。ブラベリーは軽く手を振り、ビリーブの元へ向かって行った。

「ブラベリーさん。 何してるんですか？」

「特に用は無い。 島を散策しているだけ。 君は？」

「僕は、これから家の窓拭きをしようと思ひましてね。」

ビリーブはブラベリーにそういつつ、持っていた雑巾を見せた。

「掃除。」

「はい。 今住まわせてもらっているこの家でお世話になってますから、コレくらいのことはしないとイケませんからね。」

「君は、大切な存在、守るべき存在は、いるのか？」

ブラベリーは少々片言な言葉遣いで、ビリーブに問いかけた。

「大切な存在ですか？」

ビリーブはそう言うと、ブラベリーは頷いた。

「僕に取って、大切な存在はたくさんいますね。 もちろん、守ろうとする存在も。 今まで出会った皆さんは、僕にとって守るべき存在です。」

「そんなに、たくさん？」

「たくさんかはわかりませんが・・・ 自分が皆さんの力になれるよう、今はこうやって少しずつ努力している感じですね。」

ビリーブは丁寧な言葉遣いで、ブラベリーに説明した。

ブラベリーはビリーブからの応答に、頷いた。

「そうなのか。 ありがとう。」

「旅、頑張ってくださいね。」

ビリーブは笑顔でそう言うと、ブラベリーは翼を広げ、空へと飛んで行った。

「さて、ストレンジャーさんが戻る前に、お家を綺麗にしておかないと。」

ビリーブはブラベリーを見送り終わると、掃除を開始した。

NEWビーイングキャッスル予定地

ビリーブがしばらく空を飛ぶと、特に何の変哲も無い島を見つけた。

その島には、ホープやホネスティ、プレスルにティザー。 それとチェリーにグロウの姿があった。

いろいろな道具が置いており、何かを建設している様子だった。

ブラベリーはゆっくりと高度を下げ、島に上陸した。

「・・・」

ブラベリーは島を見渡しつつ、歩き始めた。

島には特に植物等は無く、荒れた土地だけが広がっていた。

「ようブラベリー。　こんな所で何してるんだ？」

ブラベリーがのんびり島を歩いていると、木材を持って歩いていたホープが、ブラベリーに声をかけた。

「特に用は無い。　ただ散策をしてる。」

「散策ね。」

ホープはそう言うと、近くに持っていた木材を置いた。

「ホープ。　君には、大切な存在、守るべき存在はあるのか？」

ブラベリーはビリーブ同様に、ホープにも問いかけた。

「ああ、いるぜ。　そこに立っているアリス様やホネスティ。　それにプレスルやティザーだな。」

「他には、いないのか？」

「もっとも大切だと思っている存在の例だからな。　もっと他にもいると思うがな。」

「そうか。」

ブラベリーはホープと話している場所とは別の場所で作業しているホネスティ達を見た。皆はそれぞれ道具や木材を運んでおり、チェリーはグロウと共に、立てる城のデザインが書かれていると思われる設計図を持って話しをしていた。

ホネスティ達は軽く汗を流してはいたものの、表情は明るく、作業を楽しんでいる様子だった。

「具体的に、どういう風に守っているんだ？」

ブラベリーはふと思い、ホープに問いかけた。

「そうだな。　まあ見守っていることが多いかもしれないな。　あとは話しをすることかな。」

「話？」

「そうだ。　会話をしていると、みんな楽しいぜ。　話題が次から次へと出てくることもあるしな。　それに会話をしていると、仲良くなれるからな。」

ホープはブラベリーからの質問に、的確に回答した。

「そうなのか。 会話にそんな力が。」

「まあ会話は、対外誰とでも出来るからな。 今している状況でもあるしな。」

ホープはそう言った。

「ホープー そろそろ手伝ってよー」

2人が会話をしていると、ホネスティが道具を両手で持ちつつ、こちらに飛んできた。

「ああ、悪い。 そろそろ仕事に戻るよ。」

「頑張って。」

「ありがとよ。」

ホープはそう言うと、置いておいた木材を持ち、ホネスティと共に作業場所へ向かって行った。

ブラベリーはそんな様子を見終えると、再び翼を拾げ、空へと飛んで行った。

空はすでに橙色に染まっており、そろそろ夜がやってくる時間帯のようだった。

テトラクリスタルアイランド周辺 ミドルガーデン

ブラベリーが空を飛ぶ事数時間。

ラプソディのいる島へと戻ってきた。

空はすでに暗くなっており、店内に小さな明かりが点っていた。

リリリン♪

ブラベリーは店の扉を引くと、ドアベルが鳴った。

「? あ、おかえりなさいブラベリー。」

ブラベリーが店内に入ると、カウンター席の近くにいたラプソディが出迎えた。

「今日はどうでしたか？」

「ああ、いろいろと収穫できた。 マスターのおかげ。」

「そうでしたか。 それは良かったです。」

ラプソディはそう言うと、店の入り口へ向かい、看板を開店から閉店へ変え、店の鍵をかけた。

「とりあえず、一杯いかがですか？」

「ああ、願います。」

ブラベリーはそう言うと、カウンター席に着いた。

ラプソディはカウンター内で飲み物の準備をした。

「マスターは、ここで何を？」

「自分は、ここでカフェを営業しています。 自分の作った世界ですから、自分の好きな方々に出会えますしね。」

ラプソディは飲み物を準備しつつ、ブラベリーからの問いかけの応答をした。

「楽しいか？」

「ええ。 とても充実していますよ。 よしっと。」

ラプソディはそう言うと、ブラベリー用の飲み物を作り終え、ブラベリーの元へ。

「お待たせしました。 トマトジュースです。」

ラプソディはグラスに入ったトマトジュースを、ブラベリーに差し出した。

ブラベリーはグラスを手に取り、飲んだ。

「美味しい。」

「喜んでもらえてよかったです。」

ブラベリーからの感想を聞き、ラプソディは笑顔でそう言った。

「このドリンク。 自分の血と同じ色。」

「トマト自体が、赤い色をしていますからね。 ブラベリーさんの中で流れる血の色とトマトの色は、いっしょです。」

ラプソディはカウンター内においてあったイスに座り、ブラベリーを見つつそう言った。

「存在している生き物達は、皆共通点があるんですよ。自分だけ違うってことは、余りありません。」

「自分にも、それは言えますか？」

「もちろんですよ。自分とブラベリーでしたら、体の色も一緒。性別も一緒。作られた存在だっていうこともいっしょです。他にあると思います。」

ラブソディはとりあえずの例を数個上げ、ブラベリーに言った。

「そうなのか。共通点が。」

「とりあえず、今日はそろそろ、お休みになられてはいかがですか？」

ラブソディは店内においてある時計を見つつ、ブラベリーにそう言った。

「そうですね。ではそろそろ休みます。」

「お部屋はこちらを使ってください。」

ラブソディはイスから降り、近くの部屋にブラベリーを案内した。そこは小さな個室であり、イスとテーブルが置いてあった。

「イスとテーブルを退かしますから、少々待ってくださいね。」

ラブソディは一個ずつ家具を持ち、部屋の外へ持って行った。

「イスを、1つだけ。」

「あ、はい。かしこまりました。」

ラブソディはブラベリーからの注文を受け、イスを1つだけ部屋に残した。

「では、どうぞご自由に使ってください。」

「ありがとう。ラブソディ。」

部屋が綺麗になり、ブラベリーは靴を脱ぎ、イスの上に立った。

「お休みなさい。」

ブラベリーはそう言うと、翼を大きく広げ、体を丸める体制になった。すると、体の色が段々と変わり、濃い灰色から薄い灰色へと変わっていった。

「？」

ラプソディはそんなブラベリーを見て、ブラベリーの体に触れた。

「石、みたいですね。 ブラベリーはガーゴイルでしたっけ。」

ラプソディはそういって、ブラベリーの石化した左胸に手を当てた。
すると、石になった体の中で動く、心臓の鼓動が手に伝わってきた。

「生きてはいるみたいですね。 では、自分も休みますか。」

ラプソディはブラベリーが活着ていることを確認し終えると、店内にある休憩室へ向かって行った。

そして、カフェに点っていた明かりが、消された。

朝

テトラクリスタルアイランド周辺 ミドルガーデン

しばらく時間が過ぎ、夜から朝がやってきた。

本日もいい天気。 雲が少なめの晴れ晴れとした気候だった。

「うーん。」

店内の別室で寝ていたラブソディは、目が覚め、毛布の上で眠気眼を擦っていた。

「もう、朝ですか・・・」

少々ぼんやりしつつ、ラブソディは窓から入ってきた太陽の日差しを浴びていた。

しばらく朝日を浴び、ラブソディは寝るときに使っていた布団を片し、店内へ向かって行った。

「うーん。 よく寝た・・・」

ラブソディが起きて数十分後。

別の部屋で寝ていたブラベリーは目覚め、石から元の姿に戻った。

イスから降り、靴を履いた。

「若干体制が悪かったな。 体が硬いな。」

ブラベリーは両手を回すように動かし、固まった部分を解した。

その後、部屋を後にした。

「あ、おはようございます。 ブラベリー。」

ブラベリーが部屋を出ると、店内で朝食を作っていたラブソディが声をかけた。

「おはよう、マスター。　・・朝飯？」

「はい。　良ければブラベリーもご一緒しませんか？」

ラプソディは使っていたキッチンの火を止め、ブラベリーに言った。

「いいのか？」

「もちろんですよ。」

ラプソディは笑顔でそう言うと、出来た料理をお皿に移した。

ブラベリーは近くのカウンター席に座り、朝食の乗ったお皿を受け取った。

お皿には、出来立てのスクランブルエッグの乗った、トーストが乗っていた。

「では、頂きまーす。」

「いただき、ます。」

2人はそれぞれ言うと、トーストを食べ始めた。

「美味しい。」

「おいしいですか？　そう言ってもらえてよかったです。」

ラプソディはブラベリーの言った事を聞き、嬉しそうにそう言った。

「いつも、こんなに美味しい朝食を？」

「そうですね。　基本的に一人で住んで、営業しているようなものですので。」

ラプソディはトーストを食べつつ、ブラベリーにそう言った。

「マスター、貴方には大切な存在。　守るべき存在はいるのか？」

「大切な存在ですか？」

ラプソディはトーストを口に入れたまま、ブラベリーからの質問を聞き直した。

ブラベリーは頷いた。

「自分は、皆さんを作った張本人でもあります。　自分にとって、皆さんが、大切な存在であり、守るべき存在ですよ。」

「自分も、その中に入ってるのか？」

「もちろんですよ。大切な存在ですもの。」

ラブソディはブラベリーからの問いかけに、笑顔で答えた。

「今日もまた、旅をしてきます。」

ブラベリーはトーストを食べ、ドリンクを飲み終えた後、ラブソディにそう告げた。

「分かりました。頑張ってくださいね。」

ラブソディは笑顔でブラベリーを見送った。

ブラベリーは外へ出ると、翼を広げ、空へと飛び出した。

ミスティックルーイン

ミドルガーデンから飛び出し、どれくらい飛んだだろうか。

ブラベリーは休まず、翼を羽ばたかせ、海を渡っていた。

すると、前方に新たな島が見え始めた。

ブラベリーは少しずつ高度を下げ、島へ向かって降りて行った。

島へ降り立ち、ブラベリーは翼を少したたみ、島の散策を開始した。

島には緑が多く、大きな滝から流れる泉があった。

少し先には駅があり、近くの街へと向かえるようだった。

ブラベリーは特に何も考えず、好きな方向へ行き、歩き回っていた。

「階段・・・」

ブラベリーはふと足を止め、前方にある階段を見つけた。
階段はこの先の山を登るために作られているようで、上へ行けるようになっていた。
ブラベリーは一段ずつ昇り、上へと向かって行った。

階段を上り終わると、そこは広めの大地が広がっており、ちょっとした平原のようだった。
前方は海が広がっており、海の近くには柵がしてあった。
左を向くと、そこには少し大きめの家が建っていた。
ブラベリーは家の元へ行き、珍しそうに見ていた。
扉の近くには少し変わったメカが動いており、水を引いているようだった。

ガチャッ

ブラベリーが家を見ていると、ふと家の扉が開き、中からテイルスが出てきた。

「？　どうかしましたか？」

テイルスはブラベリーを見つけ、ブラベリーに問いかけた。

「君が、この家の持ち主？」

「はい。　僕の家込みの工房です。」

テイルスはブラベリーからの質問に答えた。

「そういえば、どちら様ですか？」

テイルスはふと思ひ、ブラベリーに名前を尋ねた。

「自分はブラベリー・ザ・メテオリーツと言う。」

「あ、ブラベリーって君の事だったんだね。　始めまして、僕はマイルス・パワー。　皆からはテイルスって呼ばれてるんだ。」

「自分の事を知っているのか？」

ブラベリーは自分の知らない人が自分を知っている事に驚き、テイルスに問いかけた。

「うん。前にストレンジャーから聞いたんだ。島にやってきた、新しい友達だって。」
「ストレンジャーから。」

ブラベリーは大体の話を聞き、納得した。

「ところでブラベリー。ここで何してるの？」

テイルスは少々気になっていた

「特に用は無い。散策しているだけ。」

「散策？」

「散策。」

ブラベリーはテイルスからの問いにそのまま答えた。
それ以上でもそれ以下でも無いため、言葉をそのまま返した。

「君には、大切な存在、守るべき存在がいるのか？」

「大切な存在？」

ブラベリーは目的の質問を、テイルスにも同様に問いかけた。

「そうだね。僕にとっては、皆が大切な存在かな。守るべき存在って言われると、ちょっと難しいかな・・・」

テイルスは少々迷いつつも、ブラベリーからの問いかけに答えた。

「じゃあ、君が毎日していることは？」

ブラベリーは答えを聞き、別の質問をした。

「毎日している事って言ったら、メカをいじる事かな。」

「メカ？」

ブラベリーは新たな単語を聞き、不思議そうに言った。

「うん。　この地下にいろいろ置いてあるんだけどね。　そのメカ達を作ったり、修理したりするのが、僕の日課かな。　メカと一緒にいるのが好きだって言うのもあるけどね。」

テイルスは笑顔でブラベリーにそう言った。

「一緒にいるのが、好き？」

「うん。　毎日自分が好きな人と一緒にいられるっていうのが、僕は好きなんだ。　ブラベリーは違う？」

「自分は分からない。」

「そっか。」

テイルスはブラベリーからの答えを聞いた。

その後、ブラベリーはテイルスと別れ、再び島の散策を開始した。

エンジェルアイランド

テイルスと別れ、再び旅を開始したブラベリー。
その足は森を抜け、とある島の近くへとやってきた。

『あれは、島？』

ブラベリーは森を抜け、前方に浮いている島を見ていた。
目の前に浮かぶ島は浮いており、地上からは離れていた。
ブラベリーは翼を広げ、島の上へ向かって飛んで行った。

島は草原になっており、島の中心には祭壇らしきものがあった。
その祭壇には、一人の人影が。
ブラベリーは島へ降り立ち、神殿へ向かって行った。
祭壇には大きなエメラルドがあり、その前には一人の門番らしき人が昼寝をしていた。

『見張り、なのか。』

ブラベリーは寝ている人を起こさないよう、静かに神殿の階段を登って行った。
祭壇まであと数歩の所まで行き、ブラベリーは足を止めた。
祭壇に祭られているエメラルドは緑色をしており、下から見るととても大きかった。
見張りをしている人物は、赤い人だった。

『寝てる・・・』

ブラベリーは珍しそうにその人物を見ていた。

「う、ううん。」

寝ていた人物は日差しを遮断され、影った事で目を覚まし、目を開けた。

「ん？ 誰だお前。」

祭壇にいた人物はブラベリーを見ると、眼光を鋭くしつつ、ブラベリーに問いかけた。

「旅する者だ。 名前はブラベリー・ザ・メテオリーツと言う。」

「ブラベリーか。 この祭壇に何のようだ？」

赤い門番は顔色を変えず、再びブラベリーに問いかけた。

「珍しそうな場所と、エメラルドを見たんで。 近くへ来た。」

ブラベリーは正直に質問に答えた。

「そうか。 このエメラルドは何なのか知ってるのか？」

「知らない。」

ブラベリーは顔を横に振りつつ、門番に言った。

「・・・まあ、盗みに来た訳じゃなさそうだな。」

門番はブラベリーを安全と見たのか、顔を元に戻し、言った。

「貴方の、名前。」

「俺か？ 俺はナックルズ。 ナックルズ・ザ・エキドゥナって言うんだ。」

「ナックルズ。」

ブラベリーは門番の名前を聞き、お辞儀をした。

「ナックルズ。 ここで、何を？」

ブラベリーは階段に腰掛け、ナックルズに問いかけた。

「俺の仕事は、このエメラルドを守ることだ。」

ナックルズはエメラルドを指差しつつ、ブラベリーに言った。

「誰かに、頼まれたのか？」

「いや。 誰にも頼まれちゃいねえよ。 俺がそうしたいから、そうすべきだと思うから、そうしているだけさ。」

ナックルズは空を見つつ、ブラベリーにそう言った。

「誰にも、頼まれていない？」

「ああ、生まれた時からここにいたんだ。 この祭壇に。」

ナックルズは立ち上がり、エメラルドのそばへ。

「このエメラルドは、『マスターエメラルド』と言ってな。 とても大切な宝石なんだ。」

「マスター、エメラルド？」

ブラベリーも同様に立ち上がり、マスターエメラルドのそばへ行き、エメラルドを見た。 宝石は綺麗に輝いており、中が透けそうなほど、透明だった。

ブラベリーは不思議そうにその宝石を見ていた。

「・・・お前、見た目と行動が合わないんだが、何処から来たんだ？」

ナックルズはそんなブラベリーを見つつ、ブラベリーに問いかけた。

「テトラクリスタルアイランドだ。 その前は、よく覚えていない・・・」

「テトラクリスタルアイランドってことは、ストレンジャー達の知り合いか？」

「ああ。 つい最近、来たばかりなんだ。」

ブラベリーは宝石を一通り見終え、ナックルズの方へ向きつつ言った。

「だがよくわからねえな。 前までいた場所を覚えてないなんて。」

「詳しく話すと、長い。 つい最近作られた存在、だから。」

「最近、作られた？」

ナックルズはブラベリーの言うことが良く理解できず、少々混乱していた。

ブラベリーは頷き、その場に座り込んだ。

「とあるマスターによって、自分は作られた。 ストレンジャー達よりも、もっとあとに。」

「作られたってところが、よく理解できねえんだが。 どういう意味なんだ？」

「そのまま。こちらで詳しくは、テイルスが知ってる。」

「テイルスカ。後ほど聞きに行かないと駄目か。」

ナックルズはとりあえず話しを聞き、その話を終えた。

「ところで、君は、大切な存在。守るべき存在は、いるのか？」

ブラベリーはふと思い出し、ナックルズに問いかけた。

「守るべき存在は、そこにあるぜ。」

ナックルズは宝石の方へ顔を向け、ブラベリーに言った。

「俺にとって、唯一守るべき存在だ。コレが無くなったら、俺にはすることが無くなっちゃうからな。」

「誰にも、頼まれていないのに？」

「ああ、俺がするべきことだと決めたからな。誰にも手出しはさせないんだ。」

ナックルズはそう言うと、祭壇の隅に置いておいた布巾を手にし、マスターエメラルドを吹き始めた。

『カッコいい・・・』

ブラベリーはそんなナックルズを見て、感動していた。

『誰にも頼まれていない。自分がしたいから、その行動をする。コレが、君のすべき事・・・』

ブラベリーは心の中でそう思いつつ、ナックルズの様子を見ていた。

『自分にも、そういう存在が入れば、カッコよく生活、出きるのか・・・』

「ん？ どうした？」

ナックルズはふと、ブラベリーの方へ向き、ブラベリーの様子が少し変わったことに気が付き、

声をかけた。

「君は、カッコいい。」

「は？ どうしたんだ？ 急に。」

ナックルズはよく言った事が分からず、ブラベリーの近くへ行きつつ、問いかけた。

「自分には、すべき事が無い。 何をすべきか、それを探するために、自分は旅をしてる。君は、誰にも頼まれていない。 自分がすべきことだと、悟って、行動している。 それが、カッコいい。」

「随分と変わった事を言うんだな。 お前。」

ナックルズは少々苦笑しつつ、ブラベリーの隣に座った。

「普通、だれでもだ。 頼まれた事をして、一日行動している奴なんていないぜ。 誰でも自由に生きている。 すべき事が無くてもだ。」

「？ どういう、意味？」

ブラベリーはナックルズの言った事がよくわからず、問いかけた。

「そうだな。 テイルスだったら、誰にも何も言われてないが、メカと一緒に一日を過ごしている。 ソニックだったら、一日中誰にも言われてないのにもかかわらず、好きなところへ向かって走ってる。 ストレンジャーも、同様に毎日普通に過ごしてるだろ？ 族長の仕事だって、すべきことだと悟って行ってる。 他の奴らもそうだろ？」

「ああ。 みんなすべき事がある。」

「だが、皆は誰にも指図されて無いだろ？ 自分がすべきことを、勝手に決めて、行動している。 お前も、みんなの行動を見てまねるんじゃなくて、自由に空を飛びまわって、何かしたい行動が見つかったら、それを行えばいいんじゃないか？」

「行動が、見つかったら。」

ブラベリーは少しの内容が分かり、納得した。

「ああ、お前が俺のことをカッコいいって言うのは別にいいが、俺の行動をまねてしてても、本人は楽しくないじゃないか。 好きに行動して、好きに行動する。 それが一番さ。 柄にもあわねえ事、言ったけどな。 俺。」

ナックルズはそう言うと、空を見た。

ブラベリーは、そんなナックルズを見て、笑顔になっていた。

「じゃあ、俺が好きに行動すれば、それでいいんだ。」

ブラベリーはナックルズの言ったことに納得し、その場に立ち上がった。

「ああ、守るべきもののために行動してもいい。好きな存在達と、毎日を過ごしてもいい。空を飛び回って、一日を過ごしてもいい。自由に生きなよ。」

「わかった。」

「だが、他人に迷惑をかけることは、するんじゃないぞ？ それはするべき行動ではないからな。」

ナックルズはふと思い、ブラベリーに忠告した。

「わかった。ありがとう、ナックルズ。」

ブラベリーはそう言うと、ナックルズに優しく抱きついた。

「俺の言ったことで、わかったのか？」

「ああ、十分に。」

ブラベリーはナックルズから離れ、そう言った。

「じゃあ。 また。」

ブラベリーはそう言うと、翼を広げ、空へと飛んで行った。

ナックルズはブラベリーが飛び立つと、その姿を見送っていた。

行動

テトラクリスタルアイランド 砂浜エリア

エンジェルアイランドを飛び立ち、その後。

ブラベリーは真っ直ぐにテトラクリスタルアイランドへと向かっていた。

その後、1つの家の屋根の上に降り立ち、翼をたたんだ。

ブラベリーはそこから、島の住人達の行動を見ていた。

ただ、住人を見て、耳をすませていた。

「あ～ これじゃあ届かないよ～」

ブラベリーがのんびり島の住人達を見ていると、左後方から声がした。

振り返ると、そこには青龍族の子供達が数人おり、近くの樹を見ていた。

ブラベリーは翼を広げ、子供達の近くへ向かって行った。

「・・・どう、したんだ？」

「あのね、使っていたボールが樹に引っかかっちゃったの。」

ブラベリーが子供達に問いかけると、一人の子供が樹を指差し、ブラベリーに言った。

確かに、樹にはボールが引っかかっており、子供達では取れそうに無い高さだった。

まだ羽を上手に動かすことが出来ないらしく、飛ぶことも無理そうだった。

ブラベリーは樹に引っかかっているボールを見つけると、その場を飛び立ち、樹に引っかかっていたボールを取り、地面へ降り立った。

「・・・はい。」

ブラベリーは足を曲げ、体制を低くし視線を合わせ、子供達にボールを渡した。

「ありがとう！ えっと、灰色のお兄さん！」

子供の一人がブラベリーからボールを受け取ると、お礼を言いつつ、広いところへ向かって行った。

ブラベリーは子供達が去ると、立ち上がり、再び屋根の上へ向かって飛んで行った。

再び1つの屋根の上へ降り立つと、翼をたたみ、再び島周辺を眺めてつつ耳をすませた。

「おーい！ 大丈夫かー！！」

すると、再びブラベリーの後方から声がし、ブラベリーは声の聞こえた方を見つつ、飛んで行った。

テトラクリスタルアイランド 岩山エリア

声の聞こえた方へ向かって、ブラベリーは飛んでいくと、砂浜エリアから岩山エリアへとやってきた。

ブラベリーは辺りを見渡しつつ、声の主を探した。

すると、数人の、白虎族の大人達が集まっている場所を見つけ、飛んで行った。

「しっかりしろー！ 今すぐ助けに行くからな！！」

一人の白虎の青年が、崖の下に向かって言っていた。

「どう、したんだ？」

ブラベリーはその集団の後ろへ降り立ち、一人の青年に問いかけた。

「俺達の知り合いが、崖の下に落ちちまったんだ。 助けに行くにも、崖の隙間が狭くてな、細長いロープみたいなものも無いんだ。」

「転落？」

ブラベリーは集団を掻き分け、崖の下を見た。

すると、そこには一人の白虎の子供がおり、助けを待っていた。

だが若干怪我をしている様子で、転落したその場に座り込んでいた。

「どうだ？ 見つかったか？」

集団の後ろの方にいた青年が、やってきた青年に問いかけた。

「いや、丁度切らしてる家ばかりだ。 何処も駄目だ。」

「俺達には、何の力も無いからな。 どうすることも出来ない！ クソッ！」

青年はそう言いつつ、地面を拳で殴った。

「ピスフリー . . . 族長は？」

ブラベリーはそんな青年達の下へ行き、白虎族の族長であるピスフリーのことを言った。

「一応連絡をして、仲間に探してもらってる。 だが族長様でも、怪我をした子供を助けることは難しい。」

「早くしないと、夜になっちまうからな。」

青年の一人が空を見つつ、言った。

空は橙色に染まっており、もうすぐ夜がやってくる様子だった。

ブラベリーはふと思いつき、再び崖のそばへ。

「すみません。 少し、下がってもらっても、いいですか？」

ブラベリーは崖の近くへいた青年達に言った。

「どうするんだ？」

青年達は、言われたとおりに下がりつつ、ブラベリーに問いかけた。

「少し、策が、あります。」

ブラベリーはそう言うと、両手の掌を合わせ、一気に引き離れた。

すると、掌から大量の赤い鎖が飛び出した。

「チェーン、キャッチ！」

ブラベリーはその鎖の片方を持ち、もう片方を崖の下の子供に向けて放った。
鎖は自動的に下へと伸び、鎖は崖の下にいた子供の元へ行き、体に鎖が絡まった。
ブラベリーは鎖がターゲットを捕まえると、鎖を回収した。
鎖は自動的に主の下へと向かい、子供を持ったまま崖の上へと向かって行った。

そして、無事崖の上まで子供を引き上げると、ブラベリーは子供に絡まった鎖を解いた。

「ブラベリー！」

ブラベリーが子供を回収したのと同時に、ピスフリーがやってきた。

「族長様！」

「崖の下に、子供が転落したって聞いたんだが、とりあえずは大丈夫そうだな。」

ピスフリーは連絡を聞きつけ、この場に書き付けたが、事件は解決したと悟った。

「・・・怪我、している。」

ブラベリーは子供に絡まった鎖を解き終わると、ピスフリーに子供を見せつつそう言った。
子供は両膝を怪我しており、少し血が出ていた。

「大丈夫か？」

ピスフリーはそう言うと、子供が怪我をした部分に手を当て、癒しの光を出した。
子供はブラベリーに抱かれたまま、傷を癒した。

「よし、これで大丈夫かな。」

ピスフリーは光を送り終わると、2人に言った。
ブラベリーはゆっくりと子供を地面へ下ろした。
地面に足をつけた子供は、もう立てる状態にまで回復していた。

「もう痛くない！ ありがとう！ 族長様！ えっと・・・」

「ブラベリーだ。」

「ブラベリーさん！」

子供は、ひとまず2人にお礼を言った。

だがブラベリーの名前が分からず、少々困っていたが、ピスフリーが名前を教えると、笑顔でお礼を言った。

「どう、いたしまして。」

ブラベリーはそう言うと、翼を広げ、何処かへ向かって飛んで行った。

その場に残された、ピスフリーと白虎族は、飛んでいくブラベリーを見ていた。

テトラクリスタルアイランド 砂浜エリア

岩山エリアから戻ってきたブラベリーは、再び砂浜エリアへと戻ってきた。
そして、先ほどと同じように1つの家の屋根の上に降り立ち、翼をたたんだ。
空は段々と暗くなり、島も段々と暗くなってきた。
ブラベリーはそんな空を見つつ、のんびり座っていた。

「おーい。 ブラベリー。」

のんびり空を見ていたブラベリーは、ふと、下から自分の名前を呼ぶ声がした。
ブラベリーは座っていた場所から少し移動し、下を見てみると、そこにはストレンジャーの姿が。
ブラベリーはその場から立ち上がり、下へと降りて行った。

「あんなところに座って、何してたんだ？」

「空を、見ていた。」

ブラベリーはストレンジャーからの質問に答えつつ、地面に足をつけた。

「ストレンジャーは、何を？」

「たまたま家に帰ってきたら、お前の姿を見かけたからな。 声をかけたただけだぜ。」

「そうか。」

ブラベリーはそんなストレンジャーを見つつ、そう言った。
その表情は、少し疲れている様子だった。

「今日はもう遅いし、家に泊まって行かないか？」

ストレンジャーはそんなブラベリーを見つつ、提案した。

「いいのか？」

「特に行き先も無いし、疲れてるんだろ？ たまには泊まって行けよ。」

ストレンジャーはブラベリーからの問いに答えた。

「・・・迷惑では、無ければ。」

「もちろんだぜ。」

ストレンジャーはそう言うと、ブラベリーの手を取り、家へと誘った。

ブラベリーはそんなストレンジャーに引かれ、家へと入って行った。

「ただいまー」

「あ、お帰りなさい、ストレンジャーさん。」

ストレンジャーが家に入ると、近くにいたビリーブが出迎えた。

「あれ？ ブラベリーさん。 お泊りですか？」

ビリーブはストレンジャーの後ろにいたブラベリーを見つつ、問いかけた。

問いかけに、ブラベリーは頷いた。

「あら、お帰りなさい。 スtrenジャー。」

3人が玄関で話しをしていると、キッチンから母龍が出てきた。

「あら、新しいお友達？」

「・・・ブラベリー・ザ・メテオリーツ。」

「ああ、俺が誘ったんだ。 いいかな。」

ストレンジャーはブラベリーからの挨拶を終えたあと、母龍に問いかけた。

「ええ、いいわよ。 じゃあ料理を準備しておきますから、2人とも、シャワーを浴びてらっしゃい。」

母龍は笑顔でそう言うと、キッチンへ向かって行った。

「じゃあブラベリー。 シャワー、先に浴びてこいよ。」

ストレンジャーからの誘いに、ブラベリーは頷き、シャワールームへ向かって行った。

ブラベリーがシャワールームへ入ったあと、

「ビリーブ。今日は母さんと寝てもらってもいいか？」

ストレンジャーは不意に、ビリーブに提案した。

「？　どうかしましたか？」

「ちょっとな。　ブラベリー、疲れてるみたいだから、今日は2人で寝ようと思って。　聞きたい事もあるし。」

「わかりました。　では自分の布団を移動して、新しい布団を用意しておきますね。」

ビリーブはストレンジャーからの提案に同意した。

「ああ、すまないな。」

「いえ。　気にしないでください。」

ビリーブはそう言うと、一足先にストレンジャーの部屋へと向かって行った。

「お待たせ。　ストレンジャー。」

それと同時に、ブラベリーがシャワーを終え、部屋から出てきた。

「シャワー。　どうだった？」

「とても、気持ちよかった。　ありがとう。」

ブラベリーはタオルで翼を拭きつつ、ストレンジャーに言った。

ストレンジャーはブラベリーの様子を見終えると、シャワールームへ向かって行った。

その後、4人は食事を終え、ストレンジャーとブラベリーは自室へ向かって行った。

「ブラベリーは、その布団を使ってくれ。」

ストレンジャーは自室のベットを直しつつ、ブラベリーにそう言った。

ブラベリーは毛布のそばへ行き、しばらく布団を見ていた。

「? どうした？」

そんな様子をブラベリーを見て、ストレンジャーはブラベリーに問いかけた。

「毛布。 自分は使わない。」

「あ、そっか。 お前ガーゴイルだったもんな。 じゃあ立って寝るのか？」

「いや。 石像になるんだ。 一時的に。」

「そうなのか。」

ストレンジャーは少し不思議そうに、ブラベリーの話を聞いていた。

「こっちの暮らしには、もうなれたか？」

ストレンジャーはベットに腰掛け、ブラベリーに問いかけた。

「少し、迷っていたけど、なんとか。」

ブラベリーは近くにあったイスに座り、質問に答えた。

「アルドール達に聞いたけど、お前旅してたんだってな。 どうだった？」

「ああ。 探し物は、見つかった。」

「探し物？」

ストレンジャーはブラベリーからの答えに、少し疑問視した。

「こっちの世界に来て、何もすることが無かった。 だから旅をしてたんだ。」

「探し物を求めてか？」

「そう。 それで、いろいろな場所を見て回った。 ナックルズから、とてもいい事を、聞いたんだ。」

ブラベリーはその時の事を思い出しつつ、ストレンジャーにそう言った。

「ナックルズからか。何をだ？」

「自分が、すべき事。」

ブラベリーはそう言った。

「皆は、他の存在達から、頼まれて、ずっと行動しているんじゃない。自分がそうしたいから、自主的に行動しているんだって事を。それで、自分は今日、行動に出た。」

「どんな行動だ？」

「他の存在達の、助ける行動。」

ブラベリーは今日したことを、ストレンジャーに言った。

「それで、他の人達が話してたのか。」

「何を？」

「今日、珍しい人にあって、助けてもらったって事だ。灰色の、大きな翼を持つお兄さん。ブラベリーの事だったんだな。」

ストレンジャーは子龍達が言っていた事を思い出し、ブラベリーを見つつそう言った。

「人助けをしてたのか。」

「ああ、自分が出来る限りの、行動をしようって、決めた。マスターから授かった、この体で、出来る事を。」

ブラベリーは自分の胸の前で拳を握り締め、ストレンジャーに言った。

「そういえば、あの時マスターは、鎖がどうこう言ってたな。お前、鎖で何か出来るのか？」

ストレンジャーはブラベリーと出会った時に、マスターが言っていた事を思い出し、ブラベリーに問いかけた。

ブラベリーは頷き、両手を合わせ、手から赤い鎖を召還した。

「この鎖の、事。」

「それだな。お前は、鎖を操れるのか。」

「この鎖は、マスターが、他人との関係を結び続けるために、自分の体に秘めさせた鎖。俺の体の中に流れる、血液の色をしている。」

ストレンジャーはベットから立ち上がり、ブラベリーのそばへ行き、鎖を見た。

「確かに赤い鎖だな。それに、鎖自体が動いてる。」

ストレンジャーはブラベリーの持っていた鎖を見つつ、ブラベリーに言った。
鎖は、鎖自体が意識を持っているかのように、軽く浮遊しつつ動いていた。

「この鎖は、自分の意思を通じて、動いてくれる。何もしない時は、浮いている。」
「鎖自体も頑丈そうだな。これで、何かしたのか？」

ストレンジャーは鎖を一通り見終え、ブラベリーに問いかけた。

「今日は、子供を一人、救助した。」

「どういう風にだ？」

「子供の体に鎖を巻きつけて、崖の下から引き上げた。」

ブラベリーはそう言うと、鎖を伸ばし、ストレンジャーの体に軽く巻きつけた。

「なるほどな。自在に動く鎖で、捕らえることも助けることも出来るのか。」

ストレンジャーは自分の体に巻きついた鎖を見つつ、ブラベリーにそう言った。
ブラベリーは頷き、巻きつけた鎖を回収した。

「でも、まだ余りなれてないみたいだな。少し疲れた顔をしてる。」

ストレンジャーはブラベリーのそばへ行き、ブラベリーの顔を見つつ言った。

「そうか？」

「ああ。余り無理はするなよ。・・・もう寝ようか。」

ストレンジャーは部屋に置いてあった時計を見つつ、ブラベリーにそう言った。

「ああ。」

ブラベリーはそう言うと、その場に立ち上がり、部屋の隅に行き体を丸めた。

「おやすみ。」

ブラベリーはストレンジャーにそう言うと、目を閉じた。
すると、段々とブラベリーの体が薄い灰色へと変わっていった。

「？」

ストレンジャーは、そんなブラベリーを見て、そばによった。

『石、みたいだな。 ガーゴイルは、こうやって寝るのか・・・』

ストレンジャーは石になったブラベリーを見つつ、そう思った。
その後、ストレンジャーはベットへ入り、寝てしまった。

テトラクリスタルアイランド

ストレンジャーの家での夜を終え、島に朝がやってきた頃。

「うーん。」

ストレンジャーは目を覚まし、ベットから起き上がった。
それとほぼ同時に、ブラベリーも目を覚まし、元の姿に戻った。

「おはよう、ブラベリー。」

ストレンジャーは寝ていたベットから立ち上がり、ブラベリーに挨拶した。

「ストレンジャー、おはよう。」

ブラベリーも同様に立ち上がり、ストレンジャーに挨拶した。

『今日は、体勢が良かったかな。 余り体が、痛くない。』

ブラベリーは少し体を動かしつつ、背筋を伸ばした。

「朝飯。 食べようか。」

ストレンジャーはそう言うと、ブラベリーは頷き、2人は下へと降りて行った。

その後朝食を終え、ブラベリーはストレンジャーにお礼を言い、外へと出て行った。
外へ出ると、ブラベリーは翼を広げ、空へと飛んで行った。

ストレンジャーと別れたブラベリーは、ラプソディの入るカフェへと向かって飛んでいた。島の近くになると、高度を下げ、島へと着地した。そしてカフェの近くへ行き、扉を開けた。

リリリン♪

「いらっしゃいませー あ、ブラベリーさん！」

店へ入ると、開店準備をしているラプソディがいた。先ほど開店したばかりらしく、各テーブルを布巾で拭いていた。

「昨日はいらっしゃらなかったの少し心配してたんですが、どちらへ？」
「ストレンジャーの家に、泊まった。」
「そうでしたか。それはよかったです。」

ラプソディはそう言うと、ブラベリーはカウンター席へ。

「あ、何かお飲みになりますか？」
「いや、いい。開店準備をしてくれ。」
「すみませんね。」

ラプソディはブラベリーにそう言われると、手を動かした。

「そういえばブラベリーさん。少し表情が明るくなっていますが、なにかいい事がありましたか？」
「そうか？」

ラプソディにそう言われ、ブラベリーは顔を触りつつそう言った。確かに最近までのブラベリーとは少し表情が違い、少し明るい顔になっていた。

「その様子ですと、悩み事は解決したようですね。」

ラプソディは苦笑しつつ、ブラベリーに言った。

「いろいろ旅して、するべき事が見つかった。これからは、皆を守る、助ける行動をすると決

めた。」

「それはカッコいいですね。自分で決めたことですから、確実にやり通せますよ。」

ラブソディは手を止め、ブラベリーに笑顔でそう言った。

「ありがとう、ラブソディ。」

ブラベリーはそう言われ、笑顔で言った。

「それもコレも、マスターのおかげ。ありがとう。」

「自分はたいしたことはしてませんよ。ブラベリーさんが見つけたい。それだけの意思でそこまで行ったんですから。」

ラブソディは各テーブルを拭き終え、カウンターへ戻ってきた。

「ブラベリーさんの努力が叶って、見つかったと言っても、間違いではありませんよ。」

「そうか。」

ブラベリーはそう言われると、席から降りた。

「そろそろ開店、だったな。俺はまた、自分のしたい行動を取りに、行く。」

「はい。頑張ってくださいね。またいつでもいらしてください。」

ラブソディは別れ際にそう言うと、ブラベリーは片手を挙げ、ラブソディに返事をした。そして店を後にしたブラベリーは、翼を広げ、何処かへ向かって飛んで行った。

その後、自分のすべき行動が見つかったブラベリーは、好きな場所へ向かって飛んで行き、自分がしたい行動を取って毎日を過ごしていた。

時に感謝され、お礼を貰うことがあったが、ブラベリーはいつでも同じ笑顔で答え、一日を過ごすようになった。

夜はストレンジャー達のいるテトラクリスタルアイランドや、ラブソディのいるカフェで一晩を過ごすようになった。

マスターから受けた感謝を与えるかのように、ブラベリーは皆に手助けを与える行動を、取り続

けたのであった。

—E P I S O D E E N D—